

これまでの学習をふり返り、要点を復習し、組版の基礎を身につけよう

組版とはその物質が変化を続ける運動であることを体感として学んだ。

文字も約物もさまざまなアキもまた物質であり大きさを持つこと、

私たちはこの科目で活版実習と刻字実習をとおして、

組版は、文字を取っ技芸であり、デザインの基礎のひとつである。

20180106

後期〈組版デザイン論〉第14回

組版設計のポイントと最終課題

前田年昭

tmaeda1966516@gmail.com

表記の原稿整理と組版は、縦組みか横組みかという組版方向の土台のうえにある（日本語の表記は縦組み用と横組み用と別々だと考えておくことが必要）

縦組み中での欧字は横倒し組みするのか、一字ずつ立てるのか

数値と単位記号とはできるだけ同じ用字系にする

42,195円 四二・一九五キロメートル (42・195 km)

組版で処理する場合は「人々」をまとめて追いつ出すのか、追いつむのかに分かれる

行頭の「々」を「人」に書き換えるのか、組版で処理するのかに分かれる

編集の仕事との分担、責任と権限によって

「人々」の「人」が行末に「々」が次の行頭に来た場合、……

第七条 禁則処理とは、独り立ちしていない文字や記号符号に対する心配りと捉える

※行長（基本字詰め）によって動的に考えること。新聞のように行長が短い（字詰めが少ない）場合は、多重約物（＝半角約物が連続する）の場合でも、それぞれ全角取りにするほうが適切な場合もある

対で考える→“起こし”と“受け”は同格

約物の区切りの強さの階層にしたがい、同じ階層は同じアケ幅にする

行頭は固定（方式は複数）、行中は浮動、行末は固定（方式は複数）を基本にする

第六条 半角約物は行頭、行中、行末ごとにルール化する

事前のテキスト整理で洋数字やアルファベットのいわゆる半角・全角混在は正しておくこと

疑問符・感嘆符はアルファベットで選んだ書体にするのが基本

洋数字、アルファベットは異なる用字系に属しており、和字従属書体は使わない

約物は漢字、仮名のウェイトにあわせず、細いものにするという考え方が基本

約物

洋数字、アルファベット

仮名（平仮名、片仮名）

漢字

第五条 書体の選択は文字クラスごとに考える

組版は言語ではなく、用字系に依存するからであり、その文字や記号がどの用字系に属するのかわねに意識することが必要である。

第一条 組版の基本単位をそろえる

文字はそれぞれの文化圏の歴史のなかで生まれはぐくまれて来た。

紙と印刷が発明され、書物がこしらえられるようになった。文字は、印刷物が端物であれべし

シ物であれ、紙の上に配置され、排列される。

したがって、文字の大きさとその単位は、**紙の単位**にしたがう。

ポイントという単位は、紙の縦横の長さが**インチ**（ヤード・ポンド法）である世界のもので、ある。和文組版の単位は紙の縦横の長さが**ミリ**（SI単位系、メートル法）である世界にあわせて、文字の大きさをQ、長さをHでそろえることが出発である。

1H(Q) ≡ 0.25mm 1mm ≡ 4H(Q)

また、単位は混在して使ってはならず、端数を丸めた概数をもとに計算することは避けなければならない。

※組版の入門書や解説書、アプリケーションソフトなどが仕事の役に立つものかどうかは、

単位をどうとらえ記述しているかで判別することができる。

第二条 基準となる点と線を意識する

数値をどこから測るのかということにつねに自覚的でなければならぬ。

和文組版は正方形のハコを積み上げていく組版である。

和文組版では、文字枠のセンター、行のセンター、文字枠との間隔**送り**、**行送り**と、隣りあう文字枠と文字枠との間隔**(字間)**、隣りあう行幅と行幅との間隔**(行間)**との両方を使い分け、あるいは概算に使えるように習熟する必要がある。

本文組みの基本である**ベタ組み**は、**字間ゼロ**での文字の排列という字間による定義も正しい、**字送り**を字幅と同じにした**排列**という字送りによる定義も正しい。

行送り方向では、たとえば本文中で文字サイズを一部変更するという場合、行送り指定優先か、行間指定優先か、または行取り指定（これが基本）か、ちがってくる。

第三条 版面と余白との関係は版面優先で決める

版面設計にあたっては、文字サイズと字送り（字間）と字詰め、行送り（行間）と行数でかたちづくられる版面の大きさを優先する。

実際には、版面と余白とを往復しながら決めていくわけだが、紙の大きさから余白を差し引いた残りを版面に、という考えをとってはならない。

こうしないと、字送り（字間）を基本にした組版演算を貫くことができず、図版や写真の食いつ込み部分や段落最終行などの字送り（字間）が、他の部分の字送り（字間）と食い違ったりして読みのリズムを崩してしまうことになるからである。

組版はピクトを刻むことであるという基本をつねに意識することが大切である。

※なお、ここで論じているのは**空間**（紙の上）での組版であり、**時間**と**空間**（ウェブや電子書籍）での組版の**リズム**は異なつた階層のものとして考えられなければならない。

第四条 組版演算の基本に習熟する

行地（**原語**の**字送り**方向の**地**）

＝字送り×（**字詰め**数－1）＋**字数**

＝**字数**×**字詰め**数＋**字送り**×（**字詰め**数－1）

※ここでいう**字幅**とは縦組みでは文字の高さ、横組みでは文字の幅のこと

原語の**行送り**方向の**地**

＝**行送り**×（**行送り**－1）＋**行地**

＝**行地**×**行送り**＋**行送り**×（**行送り**－1）

※ここでいう**行幅**とは縦組みでは文字の幅、横組みでは文字の高さのこと

※本文組版では**トラッキング**、**カーニング**は基本的に用いないで、レイアウトソフト設定での**字間**（字送り）と**行間**（行送り）の設定によること